

『ひとこと仰ってください』

聖書 ルカによる福音書7章1～10節 讃美歌 16 363 356 357 28

説教 森田幸男牧師

今日はただいま朗読されました箇所を通して、共に神様の恵みに与りたいと思います。

小見出しに、「百人隊長の僕をいやす」とありますように、これはローマ軍の百人隊長の僕が死にかかっていたのをイエス様がいやされた物語であります。私たちはこれ迄この物語を何度も読んできましたが、今改めてこれを読んでみて、この物語の持つ意義深さに非常に驚きを感じている次第です。何と美しく、感動的で、重要な物語でしょうか。

皆さんもこの物語を聞かれたり、読んだりされて来たと思いますが、2節に、「ある百人隊長に重んじられている部下」とあります。以前の口語訳聖書では、「ある百卒長の頼みにしていた僕」と訳されておりましたが、皆さんは、この「部下」、この「僕」は、一体、何才位の人と思いついて来られましたでしょうか。同じような話がマタイによる福音書の8章に記されておりますが、その6節には、「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています」とあります。わたしたちは、「中風」と聞き、「重んじられている部下」、「頼みにしていた僕」と読みますと、おのずから、この部下、僕が、相当の年齢の大人を連想しないでしょうか。わたしもこれ迄そのようなイメージで、この物語を読んでまいりましたが、今回この物語を改めて読んでみまして、これまでと違う情景が浮かんできました。

結論的なことを申し上げますと、この僕は、わたしにとっては、10台の少年か少女の姿として浮かび上がってきたのであります。どちらかと言えば少年の姿の方が強いのですが。ですから、「部下」という訳語も、「僕」という訳語も、ふさわしくないように思います。むしろ、「従者」と訳したく思います。少年の「従者」であります。繰り返し申すことですが、聖書の翻訳という仕事は極めて重要でありますし、極めて困難な作業であります。訳が変われば、イメージが、情景が、がらっと変わってしまうからです。

今日の箇所の2節には、「ある百人隊長に重んじられている部下」とあり、そして、10節には、「使いに行った人たちが家に帰ってみると、その部下は元気になっていた」とありますが、この「部下という言葉は、ギリシャ語では、「ドゥーロス」でありまして、これは、文字通りには、「奴隷」という言葉です。口語訳では、「僕」と訳しています。それに対し、7節には、「ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください」とありますが、この「僕」は「ドゥーロス」ではなく、「パイイス」という言葉です。この言葉の第1の意味は、「子供」です。親に対しての「子供」、大人に対しての「子供」です。ですから、「少年」「少女」という意味になります。そこから、第3、第4の意味として、「しもべ」「従者」「召使」「家来」「奴隷」等々の意味にも訳されます。

わたしは、2節と10節の客観的な叙述の部分の「ドゥーロス」は「従者」と訳し、7節の百人隊長の口からでた言葉、「パイイス」の方は、「わが子」と訳したいと思います。百人隊長にとって、このパイイスは「かけがえのない従者」だったので。異国に遠征、駐留している百人隊長にとって、この従者はかけがえのない存在になっていました。「わたしのパイイス」(7節)という表現は、百人隊長の口癖だったのではないのでしょうか。ですから、友人たちの口からも、「ひと言おっしゃってください。そして、わたしの子(パイイス)をいやしてください」という表現が取られたのです。これは百人隊長の口真似だったでしょう。

「百人隊長にとって、この従者「ドゥーロス」は、わが子(パイイス)同然に、かけがえのな

い存在になっていたのです。「どうか助けてあげてください」というのが、百人隊長の意を汲んだ友人たちの思いであったと思います。

この百人隊長のカファルナウム駐留は、昨日や今日の駐留ではなかったと思うのですね。何故なら、ユダヤ人のために、彼らが最も重んじる神礼拝のために会堂を建ててあげたというのです。そして百人隊長の切なる思いを受け止めて、使いに出る友人たちもいたということでもあります。これはユダヤ人の友人なのか、ローマ人の友人なのか、百人隊長の仲間なのか、それは分かりませんが、このような人々が彼のまわりに、しかも非常に密接な間柄、関係にあるものとしていたわけですから。これは、昨日や今日のことでないと思うのです。そして、長く駐留していれば、百人隊長なら自分専用の公邸、公舎があったと思うのです。そこには当然奴隷の従者もいたことでしょう。この「パイプ」はその一人だったのでしょうか。

この件に関して結論的なことを申せば、当然このドゥーロスというのは奴隷なんです。奴隷なんですけれども、「中風」と聞くと年配のイメージが浮かびますけれども、この子は従者なんです。奴隷なんです。奴隷なんですけれども、この「ひと言おっしゃってください。そしてわたしの僕をいやしてください」という、この「僕」と訳された「パイプ」という言葉は、先ほど申しましたように、通常は「子供」を指す言葉なのです。親にとっての子供、大人に対しての子供、そして「奴隷」とか「召使」という意にも第三、第四の意味としてはありますけれども、まずは親にとっての「子供」、大人にとっての「子供」、これが「パイプ」という言葉です。百人隊長にとってはこの「従者」は「わが子」のようにかかけがえのない、大事な存在になっていたのでしょうか。

並行記事のヨハネによる福音書の4章では、これはガリラヤの王に仕える役人の息子が病気で、その役人がイエス様のところへ来て、「助けて下さい」と願い出ているという話になっておりますので、これはまた別の似たような話と言っていると思いますけれども、ここでは、「息子」という言葉は、文字通り「子」を指す「フイオス」という言葉が使われております。ですから、今日の箇所において、「ドゥーロス」とか「パイプ」という言葉を、この文脈の中でどう訳すかということがとても大事になってきます。それによってイメージがすっかり変わってしまうのです。

それで結論を申せば、この子は奴隷なんです。そして百人隊長はそれを買って求めたわけですから。当時、奴隷の相場は銀貨30枚、約三十万円だったと言われております。百人隊長が買って求めた、この子は彼の従者になりました。ところが、何かのことでこの大事な少年の従者が病気になった。そしていま死にかかっている。正に瀕死の状態です。そしてユダヤ人の長老たちが使いに行っています。友人たちも使いをしていますから、ここへくるまでに、何とかしてこの子の病気を治そうとして、ありとあらゆる事を試みたであろうということは十分想像ができます。けれども、どうにもならなかった。病状は悪化するばかりです。そこで、この百人隊長はイエス様のことを聞き及んでいて、イエス様なら助けてくださると思ったのです。信じたのです。そして先ずユダヤ人の長老たちに使いにたってもらい、さらに友人たちにも使いになってもらったのです。

彼は友人たちを通して言わせていますね。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。」この言葉の背景にはこういうことがあります。ユダヤ人というのは、自分たちこそ、唯一にして、聖なる神を礼拝する聖なる民ということで、他国の者たちは異邦人です。「異邦人」というのは蔑称なんです。ね。「汚れた民ども」という感じなんです。ですから、そういう異邦人とは付き合わない。

そういう者の家には行かない。そういう者を自分の家に入れたい。それが当時のユダヤ人の習慣だったわけです。その事をこの百人隊長はよく心得ていて、自分の家に、ユダヤ人であられるあなた様をお迎えすることはできませんと、彼は遠慮しているわけです。勿論それ以上の意味を含んでおります。主イエスの権威への畏敬と信頼ですね。「わたしの方からお伺いするのさえ相応しくないとおっしゃいましたので、御願いで長老方に行って頂きました。そして、私の家にお出で下さると聞きましたので、今、友人を通してもう一度申し上げますけれども、どうかご足労下さいませぬように。(ただ)ひと言おっしゃってください。」前の口語訳ですと、「ただお言葉をください」という訳になっておりましたが、文字通りには新共同訳の「ひと言おっしゃってください」の方が、原文に忠実な訳になっています。

「ただお言葉をください」という訳、これも捨て難い訳だと思ふのです。「ひと言おっしゃってください」であればそれで十分です。ただお言葉をくだされば結構です。わざわざ御足労いただくには及びませぬ」とことうふうに申しております。ひと言おっしゃってください。そして、「わたしの僕をいやしてください」というこの「僕」は、先ほど申しましたように、「パイ」なんです。かけがえのない「わが子」というニュアンスなんです。

確かに奴隷として買い取り、自分の従者としたわけなのですが、この百人隊長にとってこの従者は、正に「わが子」なんです。かけがえのない子供と言つていいような従者であった。2節に、「ある百人隊長に重んじられている部下が」とありますが、このように、「重んじられている部下」とくれば、この百人隊長にとって右腕的存在という感じになるのではないのでしょうか。ここの訳も難しいところでありまして、口語訳では、「ある百卒長の頼みにしていた僕」となっていますことは先ほど申しました。「重んじられている部下」にしても、「頼みにしていた僕」にしても、年配者を連想させませぬ。この「重んじられている」とか「頼みにしていた」という形容詞は、「尊ぶ」という言葉なのです。いろんな訳を付けられるのですが、わたしは百人隊長にとって「大事な」、「かけがえのない」従者。そして図らずもこの百人隊長に代わって使いにいった友人たちの口から出た、「ひと言おっしゃってください。そしてわたしの僕をいやしてください」と言つたこの「僕」は、奴隷を表わすドウロスでなくて、子供を表す「パイ」なんです。かけがえのないわが子」というニュアンスなんです。

使いにいった友人たちが「わがパイ」と、このように言つたということは、これは百人隊長の口癖だつたのではないのでしょうか。百人隊長とこの従者の姿を見ていると、本当に実の親子のように見えた。百人隊長はそれぞれ故郷を離れ、異郷の地に長く駐留しているわけですね。この百人隊長は家族と離れていたことでしょう。そういう彼の身の回りの世話をする少年が、本当に大事な、かけがえのない従者になつたのだとわたしは思ふ。その大事な従者・パイが病気になつて、手を尽くしたけれどもどうにもならないので、イエス様に助けを求めた。このような話として私は今回読んだのであります。

この話は、読めば読むほどなんとも美しく、感動的で、そしてすごく深い内容ですね。ルカによる福音書は「外国人のための福音書」と言われます。他と読み比べましたけれど、「ああ、やはりルカがよく書けている」とわたしには思ふのであります。「ひと言おっしゃってください。そしてわたしの子どもを、難しいですね。従者なんですけれども、かけがえのないこの子を、どうかいやしてください。」ことうふうに御願ひをしています。

9節にはこのようにあります。「イエスはこれを聞いて感心し、従つていた群衆の方を振り向いて言われた。『言つておくれ、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない』と。イエス様が語られ、なされた事を見て、群衆が驚いたという話は、福

音書にはいくらもあるわけですね。ところがこの百人隊長の使いをとおして百人隊長がイエス様に申し上げたその言葉を聞いて、イエス様が非常に感心し、驚いておられるわけです。「言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」とまで言われるのです。ここで、「イスラエル」というのは当時の人々を指すのは言うまでもないわけですが、それだけでしょうか。それこそイスラエルの先祖のアブラムをはじめとして、信仰に生きたイスラエルの人々のことが聖書に満載されているわけですね。そういう人々の事もイエス様は念頭においておられると思うのです。言い換えれば、「この百人隊長の信仰は、アブラムの信仰や、その他の信仰に生きた人々の信仰に比しても決して劣るものではない。否、これほどの信仰を見たことがない」と、仰っているのです。

このように見てまいりますと、この物語は私たちがこの日本という国で伝道してゆく上で、示唆深いものがあります。本当に聖書の福音を伝えたい、そしてこの神の恵みにあずかって欲しいとの願いを私たちは強く持っております。そのためにこそ教会が建てられて、私たちは遣わされているわけであります。そして日本は、異教の国ということですが、私たちはその中の日本人なのですね。そういう者として、この伝道地である日本において、教会は如何にあるべきかということにおいて、この物語は本当に示唆深いものであります。

この百人隊長は、クリスチャンでもなんでもありません。ユダヤ教徒でもありません。生粋のローマ人なのです。ローマは世界制覇を果たしたわけですが、その軍隊の中でも、百人隊長というのは、エリート中のエリートが百人隊長として選ばれたそうです。ですからローマ軍の要の位置に百人隊長はいたわけです。その百人隊長の中からまた千人隊長が選ばれてゆくわけです。今日の箇所を見ただけでも、この百人隊長がユダヤ人を愛して、彼らのために会堂を建てた、というふうなことを彼はしたわけですね。彼は、外国人の宗教、伝統、文化を重んじたのです。「あの方はそうしていただくに相応しい人です」と、ユダヤ教の長老たちがこの人の姿勢に本当に感服しています。こんな外国人は初めて見たというか、そればかりか今度は友人たちが彼に代わってまたイエス様の所に使いとして赴いております。彼はユダヤ人とも、友人たちとも、本当に願わしい、理想的な人間関係にあったことが伺えるわけです。百人隊長が信仰に行き、伝道しているのです。

そして今見てまいりましたこの従者、若い従者ですが、彼にとっては本当に慰めをもたらす少年か、少女であった。少年の可能性の方が強いかなと思いますけれども、恐らくこのpaisという従者によって彼はどんなに慰められたかしのれない。その若い従者が突然の病で、もう死にかかっているというので、彼は本当に手を尽くしたわけですね。それでも最後の頼みとして、イエス様がおられる。イエス様なら助けてくださるに違いないと、こう彼は信じて、そしてユダヤ教の長老たちに先ず御願ひする。こういうところに窺える彼の人となりは、なんとも打たれるものがあります。

ここには、文化的というか、民族的というか、深い溝があるわけです。しかし彼はユダヤ人たちの宗教と文化を最大限重んじるわけです。干渉しないというばかりでなくて、自分は信じているわけではないけれども、彼らのために会堂を建ててあげるのです。ローマは支配している国ですね。そしてイスラエルは支配されている国なんです。けれどもそんな差異はどこにあるかというほど、その溝が埋められています。そしてそれぞれの文化を、歴史を、宗教を重んじるわけです。

そういう理想的な環境の中で手を尽くしたけれども、その子の病気はどうにもならない。そういう行き詰まり状態に至ったわけです。けれどもそこで彼はイエス様を思い起こすの

ですね。

「聖書を読む時に、想像力を活かして読め」と勧めてくれる学者もおりますので、勇気を出して読んでみましょう。或いはこのパイプ・従者が、イエス様のことを何度も言っていたのかもしれませんが、「イエス様はこういう方なんですよ。」「こんな事を言われたそうですよ。こんな事もされたそうですよ」というようなことを、自分の主人である百人隊長にこの子が伝えていたのかもしれませんが。そしてあの手この手を尽くして、どうにもならない時に、“そう言えばこの子が、イエス様、イエス様と言っていた。イエス様はもうどうにもならない病気の人を治されたのです、というようなことを言っていた。イエス様ならこの子を助けてくださるかもしれない。いな、助けてくださるに違いない”と、彼は信じた。これは書いてないことですがけれども、そういうこともあったと想像しても、そんなに見当違いではないのではないのでしょうか。

わたしは今回これを読んでおまして、この百人隊長に本当に掴まったという感じがします。非常に慕わしい人物であります。そればかりか、わたしはこの彼が、「どうぞ、ひと言おっしゃってください」と言った。自分の経験からしても上にあるものが部下に命じればその通り働くのです。だから、イエス様、主よ、あなたがひと言おっしゃってくださいれば、あなたが、『サタンよ、出て行け』『汚れた霊よ、出て行け』と、イエス様が念じ、言ってくだされば、この子の病気は治ります。イエス様はそういう権威を持っておられるということを、彼は信じたわけです。だからこそ、彼は本当に礼を尽くして、「自分の家あなたをお迎えするような資格は、わたしにはありませんけれども、どうぞお聞き下さい。この子はわたしにとってかけがえのない子なんです」と言いますけれども、その子は奴隷なのです。身分の違いがある。身分が違う。国が違う。支配する国、支配される国、文化が違う。宗教が違う。いろいろな差異、深い溝がある。そして、病気でどうにもならない限界状況がある。それでも、「ひと言おっしゃってください。そしてわたしのパイプを治してください。」そして使いに行った人たちが家に帰ってみると、その従者・パイプは元気になっていたというのであります。

わたしはここを読んでおまして、“ああ、一言でいいのだ。”イエス様のひと言、神様のひと言、そのひと言でいいのだと思いました。例えば、いろんな自分のしたこと、昔のこと、いろんな捕らわれがあるわけですがけれども、イエス様は十字架上で、ひと言、こう祈られました。『父よ、彼らを御赦してください』と。イエス様はそのように十字架上で、今、息絶えんとするその時に、『父よ、彼らを御赦してください』と祈ってくださったわけです。私たちがその祈りの中にあるわけですから、どんなに辛い問題があっても、この祈りは、私たち一人一人のためにささげられているわけでありませぬ。

また信仰が崩れそうになることだって当然ありますけれども、イエス様はペトロにおっしゃいました。『あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った』(ルカ 22 : 32)。またガリラヤ湖で、逆風に悩まされている弟子たちのところに、イエス様が波の上を歩いて近づいたと聖書に書いていますが、そうしたら彼らは幽霊だと思ったのです。するとイエス様は、『恐れるな、わたしだ』とおっしゃったという話があります(マルコ 6 : 50 参照)。この「わたしだ」という言葉は、「わたしがいる」という言葉です。私たちは、どうにもならないいろんなことにぶつかりますけれども、『恐れることはない。わたしがいる』と、イエス様はおっしゃるのです。このひと言で、もう十分ではないのでしょうか。

この「わたしだ」という言葉は、聖書の神様のことを、ヤーウエとお呼びしますが、神様ご自身がご自分でおっしゃったご自分の名前が、「わたしだ」という言葉なんです。これ

は旧約聖書の言葉、ヘブライ語ですと、「エフエー」と言います。出エジプト記の3章14節にこうあります。「神はモーセに『わたしはある。わたしはあるという者だ』と言われた。」英語では、“I am.”ですから、「わたしだ。」「わたしはいる。」という事です。意味は「わたしはあなたと共にいる」という事です。「わたしはいる。だから恐れるな」と、キリストは言われるのです。

そうしますと、今日の箇所は短く、たった10節の話ですけれども、この話を通して、神が言われたこと、イエス様のおっしゃったこと、聖書に書かれているその一言、ひと言に血が通い、命をもって立ち上がってくる。そういうふうにわたしは感じました。

「イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。『言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。』」

このカファルナウムの町は、ペトロの出身地で、イエス様が伝道の拠点とされた町です。イエス様がこの町に入られてから町の空気は非常に変わりましたが、この百人隊長がこの町に来てからも町の空気はずいぶん変わったのではないのでしょうか。

そのように、私たち一人の人間がその家にいる。その会社にいる。町にいる。学校にいる。本当に唯一の、本当に畏れるべき方を恐れ、且つ一人の奴隷に過ぎない者をもいと惜しんで、大事にして、何としてでも助けたいと、そういう思いを持って生きる人間が一人いれば、色んな争いや差異や溝があるとしても、それを埋めていくのではないのでしょうか。

イザヤ書50章10節にこうあります。

「お前たちのうちにいるであろうか / 主を恐れ、主の僕の声に聞き従う者が。」

闇の中を歩く時も、光のないときも / 主の御名に信頼し、その神を支えとする者が。」

こういうイスラエルに対する問いかけの言葉が記されています。そして殆どの人たちは闇の中で光を見失ってしまったのです。そういう中で、この百人隊長の信仰というのは、いかに手を尽くしてもう駄目という、そういう絶望状況の中で、彼はイエス様を信じたのです。闇の中で光を得なくても、彼はイエス様を信じた。そして、イエス様のひと言が、闇を光に変えてくれることを彼は信じたのです。

その信仰のきっかけを作ったのがこの従者パイイスであった。わたしは十代の奴隷の少年が、百人隊長にそういう信仰のきっかけをもたらしたのではないかと思います。

そういうことで、イエス様がこれほどに驚かれたことはないわけですが、この話、この物語は、本当にそれだけの値打ちのある実話だと思います。

「恐れることはない。わたしがいる。」

私たちはこのイエス様のひと言の故に、如何に暗い状況のなかでも、望みを持って生きて行きたく思います。

お祈りいたします。

愛と憐れみと力と知恵に満ちたもう主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは私たちを憐れみ、助けてくださいます。その事を新たに覚えて感謝いたします。本当にこの時代、様々に悩み苦しみ、行き詰まりを時代全体が覚えておりますけれども、そのような中で、尚あなたに捉えられた私たちが、闇が光に変わることを信じて、それぞれが置かれた場で、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして歩むことが出来ますように、どうか守り、導き、支えてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン